



天 気

1992年1月
Vol. 39, No. 1

巻 頭 言

一国際貢献と研究水準の向上一

理事長 浅井 富雄

近年、「国際協力」がキーワードの一つとしていたところで頻繁に用いられていますが、更に、昨年来「国際貢献」という言葉が、水戸黄門の印籠のように使われ始めました。しかし、これまでのところ、その内容はかなりお粗末といわざるを得ません。

「水は高きより低きへ流れる」ように、「学術研究は低きより高きを目指す」のが自然の成りゆきです。科学・技術の水準が高く、研究環境がよければ、研究者は魅力を感じ洋の東西を問わず諸外国からの来訪者は増し、また、諸外国からの招聘も多くなり、おのずから国際協力は密になり、最も実効のある国際貢献が可能となるでしょう。要するに、学術分野における最大の国際貢献は先ず自国の学術水準の向上と研究環境の改善、外国人研究者や留学生の受け入れ体制の整備充実にあります。そのための施策が長期的にみて最も着実で実効のあがる国際貢献でしょう。第二次大戦後の米国がそれを実証しています。昨年の巻頭言で、我国における研究者養成、研究施設設備の改善等「研究環境」の整備が急務であることを「地球環境」問題に関係づけて述べましたが、その重要性・必要性を今回は「国際貢献」という見地からも強調しなければなりません。

日本気象学会は永年にわたる会員諸氏の努力により、国際的に遜色のない水準に近づいており、また、国際貢献にも応分の役割を果たしつつあることは大変喜ばしいことです。1993年横浜で開催される IAMAP-IAHS 合同国際研究集会は、ただその2週間の会期のみに留まら

ず、それがインパクトとなって持続的な国際協力が一層発展することを願っています。昨年8月ウィーンにおける IUGG 総会期間中に、数多くのシンポジウムのテーマ等横浜での研究集会の骨格が決まりました。今後はそれを実りある内容とするための肉付けや諸々の準備作業が控えています。会員の皆様の積極的な参加を期待します。

それにつけても本学会の組織や運営の現状は成長した大人が子供の衣服を纏っている寸足らずの感じを拭えません。昨年来、機会あるごとに述べましたように、研究集会・総会を含め、学会役員の選出方式、理事会、事務局体制、支部活動等学会の組織・運営全般にわたって見直す時期にきています。また、これまで、学会の運営経費削減・事務の簡素化・事業拡充等の学会内での懸命の努力により、消費税を含む一般的な物価上昇に伴う経費自然増を吸収し、更に会員へのサービス向上を心掛けながら8年間会費値上げを抑制してきました。その努力も限界に達し、昨年来、対処方針について理事会では真剣に調査検討を重さねていますが、学会の健全な財政を維持し、運営体制の基盤を強化し、長期的・安定的に研究活動を発展させていくには若干の会費値上げは避け難い状況にあります。是非とも皆様の御理解・御協力をいただきたく存じます。また、学会の一層の向上発展のために運営上の諸問題についても御意見をいただけるようお願いいたします。